



ここ数年、「豊かさとは何か」ということを知りたくて、いろんな場所へ行ったり、人に会ったりしている。

直接的には作品制作に関係がないとしても、作品を生み出す自分がどう生きていくか、どう生きていけるかを考え続ける為に自分にとっての豊かさを知ることは必要だと思っているから。

ポートランドでレジデンスがあることを知った時、私は直感的にそこに行かないといけなかった。

近年、雑誌やテレビでよく目にするおしゃれな街、ポートランド。サードウェーブコーヒーや、クラフトビール、D.I.Yの先駆けの街。そんなキラキラしたたくさんの情報よりも私の心を打ったのは、世界中を飛び回る友人が「あの街だけは他とは違う」とぼつり呟いたことだった。

私はレジデンスの審査書類の一文に「ポートランドに住む人々の『街』に対する意識にとっても関心があります。それぞれが『自分にとっての豊かさ』を考え、また他者のそれを受け入れ、同時に育む場所として『街』を捉えているように思うからです。表面的な均質さを求めるのではなく、個々に必要なものを選択していく。その結果、世界中から注目される街としての姿があるように感じます」と書いた。それが功を奏したのかどうなのか、私はその街に1ヶ月の滞在のチャンスを得た。

このレジデンスで求められたミッションは、準備されたアクティビティ全てに参加する事と最後にオープンスタジオをする事の2つだった。それ以外の時間は基本的に自由にしてよいとの事だった。私は特にプランも決めず、制作に必要な道具はあまり持たず、生活に必要なものだけを詰めたトランク1つで旅に出ることにした。なるべく身軽に、いつも自由でいられるように。

ポートランドの空港で、レジデンスの参加者である私達6人は初めて顔を合わせ、迎えに来てくれたレジデンスの主催者である Mattと

Midoriさんの車に乗り込み、滞在先のホテルに到着した。私達はドミトリーの20人部屋に、ベッドを1つずつ与えられた。3段ベッドなんて初めてみたけど、なんだか合宿のようでワクワクした。

私達は荷物を置いて、近くのスーパーに必要なものを買出しにいくことにした。初日に一番驚いたのは、路上生活者が多いことだった。ホテルのあるOld china townには特に多かった。道端にそのまま寝ている人、布団を引いて寝ている人、中にはキャンプのようにテントを張っている人もいた。日本でも他の国でも見た事のないその光景にかなり驚きはしたが、不思議とそれは街に馴染んでいた。彼らは物乞いをするでもなく、スリのようなことをするでもなく、ただそこで自分達の生活をしていて、あまりにも堂々と歩道を占領しているので、そこを歩くことになんとか申し訳ない気持ちになって、私は歩道と車道を行ったり来たりしながら、彼らの生活の邪魔にならないよう歩くことにした。

2日目は、朝10時にMatt達が車で迎えに来てくれた。ポートランドの街の真ん中には大きな川があって、そこにいくつかの橋がかかっている。私達のスタジオがあるYale Unionはホテルから橋をひとつ渡って、徒歩30分くらいのところにあった。Yale Unionは元洗濯工場を改装したアートセンターで、中には大きなギャラリー、制作スタジオ、活版印刷スタジオ、木工室、コーヒー焙煎所、キッチンと音楽スタジオがあった。私のスタジオには大きな窓があって、そこから日本では体験したことのない強い日差しが差し込んだ。私達はそれぞれのスタジオを掃除し、荷物を整理したり、元からあった机や棚の配置換えをした。すると、まだ制作は始まっていないのに、不思議とどの部屋もその人に馴染んだ部屋になった。Mattが組んだスケジュールは1ヶ月とは思えないほどの盛りだくさんの内容で、1日中スタジオにいる事はほとんどなかった。私達はいろんなものを見て、いろんな話をして、時間があっという間に過ぎていった。

ある日、Oregon Nikkei Regacy Centerという場所に行った。そこで私達は、日本から移民したJapanese Americanと呼ばれた人々がポートランドにもいた事、私達が滞在しているホテルがあるOld china townは、かつてJapanese townだった事を知った。そして彼らが真珠湾攻撃の後、トランクひとつで街から追い出され、収容所に送られたということも。

案内してくれたスタッフのおばあさんは私達と同じルーツを持つ人で、その小さい体から溢れそうな顔で笑う人だった。案内の最後、彼女は自分の胸につけていた小さな鳥のピンを見せてくれた。そのピンはCAMP ARTと呼ばれているもののひとつで、かつてJapanese Americanが収容所での生活の中で作ったものだった。彼らは自分達の生活に必要な道具を廃材などから作った。ベッドやタンス、中には仏壇のようなものもあった。その中で、水彩画や彫刻作品なども作られた。おばあさんにお願いすると、収容庫に眠っていたたくさんの鳥のピンを見せてくれた。見たことのない鳥の形をしたものもあれば、鶴の形をしたピンもあった。どれもとても小さいけれど、丁寧な彫刻と色彩が施されていた。

彼らもこのオレゴンの風景に心奪われたのだろうか。故郷の風景を心の中で思い描いたのだろうか。私達と同じ事を考えただろうか。私達は同じ事を考えることができるだろうか。

手を動かし続けることは、祈ることと似ている。彼らが小さな小さな鳥にこめた静かな祈りをどこまで知ることができるだろう。

見学の後、川辺にある公園に行った。そこには日本から贈られた桜の並木がある。桜並木の下では、サラリーマンや子供、路上生活者達が休憩したり、遊んだり、洗濯したりしていた。

ポートランドは全てのものや人が横に並んでいる感じがする。

それが時に、引付いたり、混ざり合ったり、離れたりしながら日常がつくられていく。

Mattは何か言う時、いつも必ず「僕の意見では」という。これがこの街の全てのような気がしている。



小出麻代:ポートランドでのオーブメントでの展示風景

Gallery PARC[グランマーブルギャラリー・パルク]では、2018年9月28日(金)から10月14日(日)まで、小出麻代による展覧会「地に還る | 地から足を離す Return to the ground | Off the ground」を開催いたします。

2007年に京都精華大学芸術学部造形学科版画専攻卒業、2009年に同大学大学院芸術研究科博士前期課程版画分野修了した小出麻代(こいで・まよ/1983年・大阪生まれ)は、おもにインスタレーション作品として、シルクスクリーンや写真などのプリント、型抜き成型したシリコンによるオブジェクトなどとともに、ガラス、鏡、電球、糸、紙、落ち葉、枝、石など、私たちの身の回りで目に触れ・手に触れる素材を空間に配します。小出の「つくったもの」と「みつけたもの」は、自身の記憶や体験を出発点に展示空間内に点・線として配されます。その素材・形態・位置・距離・在り方など鑑賞者の様々な焦点によって関係性を見出され、個々の「風景」として、あるいは鑑賞者の記憶や想像を依り代とした「情景」として立ち現れます。

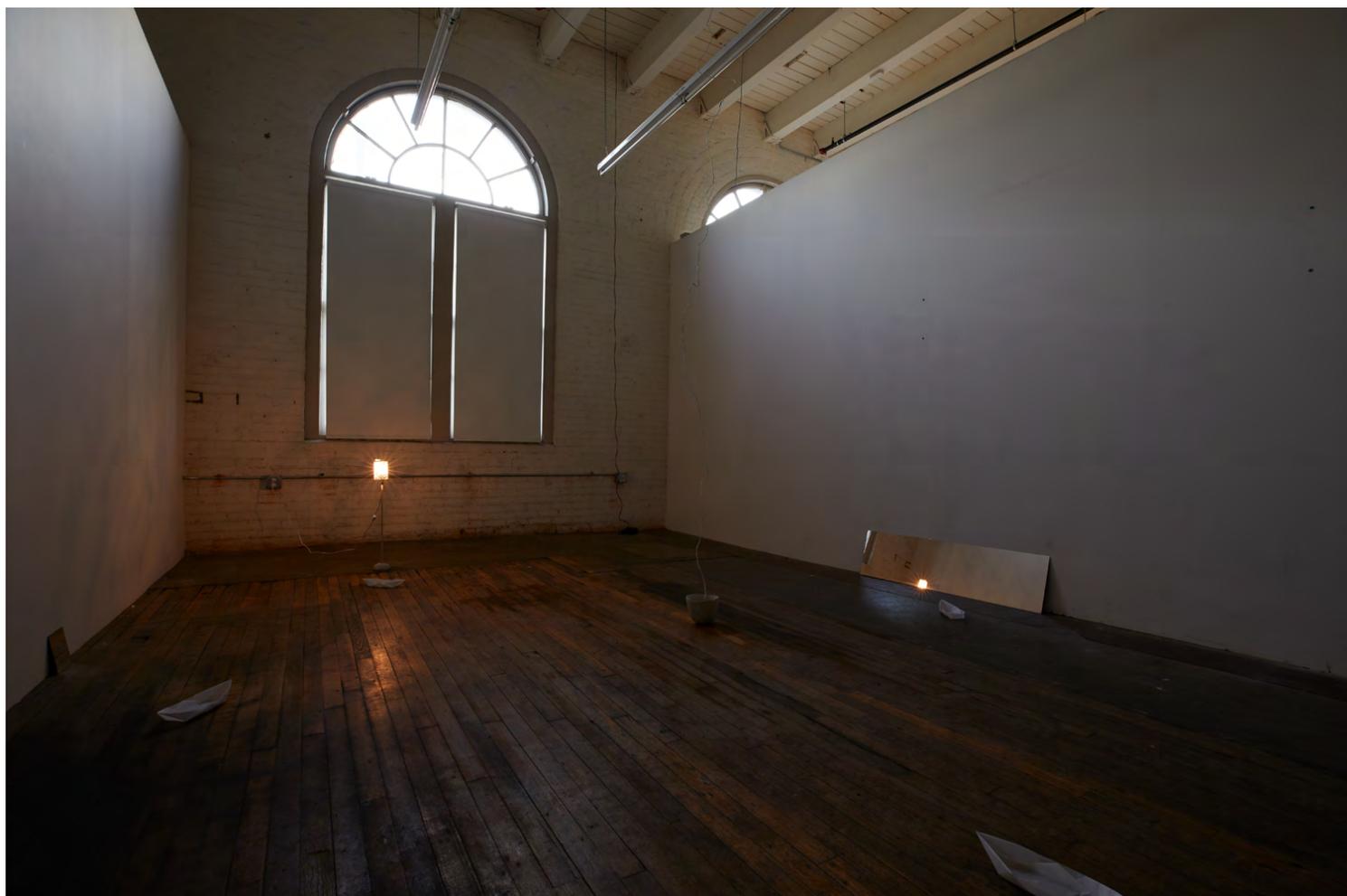
また、小出はそれらが見出され、呼び出されるための十分な「間」を取ることに注意を払いながら、空間内に「もの」を丁寧に配置しますが、近年では光(と影)、あるいは鏡(と虚像)などによって生じる関係を用いることで、ものと鑑賞者と空間のそれぞれが出会い(すれ違う)「瞬間」を内包させることにも意識を向けているように思えます。また、空間や素材への意識はそれぞれが含み持つ「歴史」(時間)への眼差しとして、近年では土地やものを始点としたリサーチにも積極的に取り組んでいます。

「自分がどう生きていくか、どう生きていけるか」を考え続ける中で、「豊かさとは何か」について興味を強くした小出は、様々な場所・土地を訪れ、多くの人々と会うことに積極的に取り組んでおり、そのひとつの機会として2018年の夏の1ヶ月、ポートランド(アメリカ)でのレジデンスに参加しました。短い滞在の中で小出は、ポートランドの人々の暮らしの中に様々な発見を積み重ねますが、その中のひとつとして、ポートランドには古くから多くの日本人が移住し、日本人町(Japanese town)が建設されていたこと、第二次世界大戦時に多くの日系人がトランクひとつの荷物だけで収容所に集められ、そこでの暮らしを余儀なくされたこと、彼らが収容所で支給された木材を使って机や椅子、ベッドやタンスなどの家具をつくったこと、またその中には彫刻や絵画などもあったこと、戦後に自由となったものの、財産のほとんどを持たなかった彼らが再び暮らしを取り戻すまでの日々を、その一部ながらも知ることになりました。

小出は本展に寄せた手紙の中で『手を動かし続けることは、祈ることと似ている』と書いています。

手を動かすことで今日を明日に繋ぎ、より良い明日を想い・願い・祈り、なにより「つくる」ために手を動かしたであろう彼らと同様に、小出も自ら手を動かすことで自身の「生きること」を模索します。

自然光の変化によって、「見えるもの / 見えないもの」が昼夜に様相を変化させる本展において、皆様にもそれぞれの豊かさを見つけ出していただければ幸いです。



小出麻代:ポータラントでのオーブメントでの展示風景

本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上【info@galleryparc.com】迄ご連絡ください。尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。

展覧会名 地に還る | 地から足を離す
Return to the ground | Off the ground

出展作家 小出麻代
<https://www.mayokoide.net>

会期 2018年9月28日[金] - 10月14日[日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで
*10月5日[金]は「ニュー・ブランシュKYOTO 2018」のため22:00まで開廊いたします。

関連イベント 2018年10月5日[金]は19:00~22:00のみ、会場に[BAR▲]をオープンし、夜の展示空間をゆっくりお楽しみいただけます。

協力 Matt Jay, Takeshi Yasura, Neu Haus Press, End Of Summer

料金 無料

内容 インスタレーション

2018年の「生業・ふるまい・チューニング小出麻代一越野潤」(京都芸術センター)での発表が記憶に新しい、小出麻代の個展。身の回りで良く目にする既製品などとともに、シリコン成形によるオブジェクトやプリントなどを空間に構成し、おもに光の変化を導き入れることで「見えるもの / 見えないもの」の境界を転換させるインスタレーションを発表。本展では、自然光を取り入れることで、昼・夜によっても在り方の異なる展示を発表する。

会場 Gallery PARC [グランマール ギャラリー・パルク] 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F MAP

アクセス 地下鉄烏丸線「四条」駅・阪急京都線「烏丸」駅22・24番出口より徒歩7分。地下鉄烏丸線・地下鉄東西線「烏丸御池」駅より徒歩7分。室町通・六角通 北東角 室町通側入り口より2Fへ

問い合わせ Gallery PARC (正木・村田・岡田) 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F
TEL= 075-231-0706 FAX= 075-231-0703 MAIL= info@galleryparc.com HP= www.galleryparc.com



《むこう側から》
2018 ミクストメディア
「生業・ふるまい・チューニング小出麻代—越野潤」(京都芸術センター)
撮影:表恒匡

小出 麻代 Koide Mayo

<https://www.mayokoide.net>

- 1983 大阪府生まれ・在住
- 2007 京都精華大学芸術学部造形学科版画専攻卒業
- 2009 京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程版画分野修了

個展

- 2017 うまれくるもの (A-lab / 兵庫)
- 2014 空のうえ 水のした 七色のはじまり (the three konohana / 大阪)
- 2013 すいこみ はきだし ひろがる (LABORATORY / 京都)
- 2010 nu show (AD&A gallery / 大阪)
- 2009 Lights, Camera, Action (AD&A gallery / 大阪)
 - mockmentary garden (番画廊 / 大阪)
 - lunch time, show time (shin-bi / 大阪)

主なグループ展

- 2018 「生業・ふるまい・チューニング 小出麻代 - 越野潤」(京都芸術センター / 京都)
- 2017 empty park (Gallery PARC / 京都)
- 2016 連鎖とまたたき (京都精華大学ギャラリーフォーラム)
 - PAT in kyoto 京都国際版画トリエンナーレ 2016 (京都市美術館)

- 2015 まちの中の時間 (A-lab / 兵庫)
 - 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2015 枯木又プロジェクト (旧枯木又分校 / 新潟)
 - NOTES 小出麻代+NO ARCHTECTS - ARTOSAKA2015 (ホテルグランヴィア / 大阪)
 - still moving「SUUJIN MAINTENANCE CLUB」(元崇仁小学校 / 京都)
- 2014 「架設」第一期 (京都精華大学T-101 / 京都)
- 2012 1floor2012「TTYTT, -to tell you the truth, -」金井悠、小出麻代 (神戸アートヴィレッジセンター)
 - ARTKYOTO2012 (ホテルモントレ / 京都)
- 2011 「鏡の反対側」小出麻代・岡山愛美展 (Division / 京都)
- 2009 Re:print (室町アートコートギャラリー / 京都)
- 2008 大学版画展 (町田市立国際版画美術館 / 東京)
 - ART UNIV. (元立誠小学校 / 京都)
 - ART CAMP 2007 (ギャラリーヤマグチ クンストパウ / 大阪)
 - 版の方法論 (海岸通りギャラリーCASO / 大阪)
 - テンカイする時間 (shin-bi / 京都)
- 2006 ART CAMP 2006 (ギャラリーヤマグチ クンストパウ / 大阪)

ワークショップ

- 2016 アートスタディプログラムびはくルーム「誰かの為のシルクスクリーン」(芦屋市立美術館)
- 2014 三井リフォーム×同じ景色を見ているsummer work shop2014-ぼくわたし家をつくる- (京都市内のリノベーション物件にて / 京都)
 - 響の郷+坂手港プロジェクト: 観光から関係へ Relational Tourism - 馬木の寺子屋「印刷の時間」(UMAKI CAMP / 小豆島・香川)

パブリックコレクション

- 京都精華大学

アーティストインレジデンス

- 2018 END OF SUMMER (Yale Union / Portland, US)
- 2013 artFUNKL residency [Aspirus 04] (artFUNKL / Manchester / UK)